

所属	言語文化研究科 日本語・日本語教育専攻 修士課程	修了年度	平成 25 年度
氏名	守内 映子	指導教員 (主査)	多田 孝志

論文題目	日本語教育における対話の有用性に関する研究 —対話型授業から学ぶ日本語学習の取り組み—
------	--

本文概要

本論文は、日本語学校での日本語教育における学習上の困難点を改善することを目指し、現行の公教育における協同的な学びの一つである「対話型授業」に手掛かりを求めた。日本語学校に在籍する留学生を対象に、「対話のある授業」を通して「思考力を深め、考える力を付ける」日本語学習の実践を行い、日本語教育における対話の有用性について考察を行った。

第1章では、研究の概要として問題の関心とその所在を述べる。日本語学校に在籍する私費留学生の多くは、進学を目的として日本語を学んでおり、その学習は受験偏重型のものへと傾いている。しかし、日本語学校における留学生達にとっての「学び」は、「学習者の既知の知識や関心を活用させながら、他者や社会と交わり、思考を深めるコミュニケーション能力を育むこと」(門倉 2006) であるという「ことばの学び」に他ならない。学校教育においても、知識や技能を獲得する「勉強」ではなく、「対話」によって世界を読み替えていく「学び」への転換がなされようとしており、日本語教育において「対話」を取り入れた授業を工夫することにより、学習者は日本語への理解を深めると同時に、自らが考え自らが判断して進路を模索し、多面的な角度から物事を捉える「考える力」を育むことができると考える。

第2章では、日本語学習の中に対話が表れるピア・ラーニングをはじめとする協働型学習に関する先行研究を概観する。日本語教育においては、「対話」と「会話」の違いがほとんど意識されておらず、「対話」を軸とした学習観や教室活動が構築されていない。そこで、学校教育において実践されている対話型授業との違いを考えた上で、大学や大学院に進学する前の日本語学校での学習に着目する。留学生にとっては日本語力も確かに必要であるが、それ以上に重要で開発すべき総合的な力(川上 1998)を身に付ける土台作りの可能な場所が、日本語学校であると主張する。

第3章では、対話論をめぐって対話型授業について説明する。本論文における「対話」の概念は、多田(2006)の提唱する「共創型対話」の理念を援用する。学校教育であれ日本語教育であれ、「21世紀型人間形成の教育」における根幹をなすものは「対話」である。かねてより「共創型対話」の理念を取り入れ、「対話型授業」に取り組んできた国公立学校の研究授業を、2012年11月から約1年間を通して参観し、本論文の実践である日本語学習に生かせる効果的な手立てを体系的に7つの視点に整理する。

第4章では、2013年10月からのA日本語学校における授業実践を紹介し、学習者が授業中に行った対話による話し合いの録音データ、対話活動及び小論文執筆の際に使用したワークシートや授業後の振り返りシートの記述内容、さらにフォローアップインタビューをもとに分析を行った。その結果、日本語による対話活動を通して思考を深めたり広げたりできたことや、他者との対話というつながりを持ちながら相互作用することによって新しい学習方法の可能性が拓かれてくること、また、楽しい授業環境を創出することができ、認知面のみならず情意面でも効用があったことが示唆された。今後の課題としては、「対話を行わない場合との比較」「対話における発言頻度と学習の質的向上との関係」「レベル別・教科別の『対話型授業の有用性』についての検討の必要性」といった三点を挙げる。

第5章では、わずかな事例ながらも、対話型授業は日本語学習上の効果があり、その困難点が改善される兆しが見られたことから、従前の日本語教育を乗り越えるためのヒントが、問い直しを迫られた学校教育で必要とされている「対話力」育成のための対話型授業に見出すことができた結論づける。